



Data 2022-87

監督・脚本：カンテミール・バラゴフ
 プロデューサー：アレクサンドル・ロドニャンスキー
 原案：スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』
 出演：ヴィクトリア・ミロシニチェンコ／ヴァシリサ・ペレリギナ／アンドレイ・ヴァイコフ／イーゴリ・シローコフ

👁️👁️ みどころ

2022年2月24日のウクライナ侵攻後、ロシアは西側諸国から嫌われ者になっている。そんな中、こんな映画が！監督とプロデューサーの“反戦メッセージ”に驚くとともに、本作のタイトル、原案、テーマに注目！

「“わたしたち”の戦争は終わっていない。」をテーマにした本作の主人公は、元女兵士のイーヤとマーシャ。息子を亡くしたマーシャが、イーヤに持ちかける“ある策略”とは？“玉の輿”婚の可能性の見たマーシャの選択は？そして、原題にされている“のっぽ”ことイーヤの選択は？



■□■原題は？原作は？この邦題の是非は？■□■

本作の原題は『Dylda』。これは「のっぽ」という意味だが、邦題は『戦争と女の顔』だ。他方、本作の原案になったのは、ノーベル文学賞受賞者スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの著書『戦争は女の顔をしていない』だから、邦題がそれを意識したのは当然だ。

本作の主人公は、1945年の戦争終了後、レニングラードの傷病軍人が多く入院している病院で働く看護師のイーヤ（ヴィクトリア・ミロシニチェンコ）。『Dylda（のっぽ）』はそんな大柄の看護師イーヤのあだ名だから、タイトルはこのヒロインの人間性や生き方に焦点を当てたもの。他方、『戦争は女の顔をしていない』は、ソ連では第2次世界大戦に100万人を超える女性が従軍し、看護師や軍医としてのみならず、兵士として武器を手にして戦ったにもかかわらず、戦後、彼女たちは世間から白い目で見られ、自らの戦争体験をひた隠しにしなければならなかったことに焦点を当てたタイトルだ。

それに対して、『戦争と女の顔』は、何でも一般化、抽象化（曖昧化？）してしまう今ドキの日本の風潮に合わせたもので、あまりにもぼんやりしたタイトル。したがって、ホントはこれではダメだ、と私は思うのだが・・・。

■監督とプロデューサーから、強烈な反戦メッセージ！■

2022年2月24日のロシアによるウクライナの侵攻から5カ月を経た今、ウクライナ戦争の長期化を踏まえたうえで、欧米を中心とする西側民主主義国からは戦争反対の声が高まっている。本作は第72回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門で国際映画批評家連盟賞と監督賞をダブル受賞、第92回アカデミー賞で国際長編映画賞のロシア代表等の話題作。また、ウクライナ生まれのアレクサンドル・ロドニャンスキーは、ロサンゼルスを中心に活動する、ロシアで最も多作なプロデューサーで、『裁かれるは善人のみ』（14年）『シネマ37』（162頁）や『ラブレス』（17年）『シネマ42』（82頁）等々有名。他方、1991年にロシアに属するカバルダ・バルカル共和国に生まれたカンテミール・バラゴフは、ロシアの巨匠アレクサンドル・ソクーロフのもとで学んだ新鋭で、本作は彼の長編第2作目だ。私は本作の監督はてっきり女性だと思っていたが、鑑賞後そうではなかったことを知ってビックリ。

アメリカでは、「ベトナム戦争反対」「大統領は退陣せよ」と唱えることは自由だが、ロシアでは、「ウクライナ戦争反対」「反プーチン」等と唱えることは身の危険を伴うことになる。ところが、何と本作のパンフレット冒頭には、「監督・プロデューサー反戦メッセージ」が掲載されているので、それに注目。両者はそれぞれ、「戦争より悪は存在しない。」「戦争に『NO』を。」と結んでいるが、そんなことをして、彼らは大丈夫なの？

■戦争にはPTSDが！その症状は？ある悲惨な結末は？■

ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、ヴァレンチン・ヴァシヤノヴィチ監督のウクライナ映画、『アトランティス』（19年）と『リフレクション』（21年）の日本での上映が急遽実現した。『アトランティス』は、戦後1年目となる2025年のアゾフスターリ製鉄所を舞台とし、元ウクライナ兵士が主人公だったが、彼は“戦争の後遺症”とも言うべきPTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しんでいた。

本作冒頭、病院で勤務中のイーヤが一瞬全身硬直状態になり、意識が飛んでしまうシークエンスが登場するが、それはイーヤも戦争による後遺症としてPTSDに苦しんでいるためだ。PTSDの症状として、本作冒頭に見るようなものがあるのかどうかは知らないが、このワンシーンを見ただけで、本作のテーマが、「わたしたち」の戦争は終わっていない一。であることを実感！さらにニコライ・イワノヴィッチ院長（アンドレイ・ヴァイコフ）に呼び出されたイーヤは、「死者が出た。その分の食糧をもらいなさい」「坊やのためだ」とアドバイスされていたが、それは一体なぜ？その後、イーヤが子守りに謝礼を払いながら、坊やのパーシュカ（ティモフェイ・グラスコフ）と暮らしていることがわかるが、パーシュカはイーヤの子供なの？いやいや、パーシュカとじゃれ合っている最中に発作が起きてしまったイーヤは、誤ってパーシュカを下敷きにしてしまったから大変だ。

その後、暗い表情をしたイーヤのもとに、軍服を着た女性マーシャ（ヴァシリサ・ペレリギナ）が訪れ、「のっぽさん」「会いたかった」と互いに再会を喜んでいるシークエンス

が登場する。そして、子供について尋ねてもまともに返答をしないイーヤに対し、しびれをきらせたマーシャが、「死んだの?」と聞くと、イーヤは、「そうよ」「責めてもいい」と答えたから、アレレ……。やっぱり、あの時パーシュカは死んでいたわけだが、実はパーシュカはイーヤの子供ではなく、マーシャの子供だったらしい。これは大変だ。その後の物語の展開は如何に?

■□■マーシャの言動はヘン! マーシャの後遺症は? ■□■

イーヤののっぽぶりは最初はスクリーン上からわからなかったが、物語が進むにつれてそれがハッキリしてくる。他方、イーヤの戦友だったというマーシャは、イーヤに預けていた子供が死亡したことを知った後、イーヤを連れて街に繰り出したから、アレレ。それが、彼女の哀しみのはけ口なの? 社交場は休業だったが、そこへ車に乗った男2人がナンパしてくると、落ち着きのないウブな男サーシャ (イーゴリ・シローコフ) とすぐに肉体関係を結んだから、さらにアレレ……。イーヤもどこかヘンだが、マーシャはそれ以上にかなりヘンだ。

他方、戦場の爆弾の破片で傷を受けたマーシャのお腹には大きな手術痕があったが、鼻血を出して倒れたマーシャを診察したニコライ院長に対して、「妊娠してるかも……」と答えたから、アレレ……。ニコライ院長は医者らしく「手術をしてくれよう。命を生む器官は残っていない」と返したが、なぜマーシャはニコライ院長にそんなことを? さらに、マーシャはイーヤに対して、「私の子供を生んでほしい」と要求したが、それはどういう意味? そして、抵抗するイーヤに対して、「私のパーシュカを死なせた。新しい子供が欲しい」とイーヤを責めるように強く要求したが、それもどういう意味? 以降、スクリーン上では、マーシャによる何ともおぞましい(?) “ある策略” が展開していくので、それに注目。

■□■子づくりのお相手は? 3人のベッドシーンは? 妊娠は? ■□■

平時においても“安楽死”は大きなテーマだが、傷病軍人を多く抱えた病院では、とりわけそれが深刻。「もう人間じゃない。終わりだ」と吐き捨てている患者ステパン (コンスタンチン・バラキレフ) の病床を訪れた妻は、院長に「助けてください」と懇願したが、回復の見込みがなく、介護施設も拒むステパンを思い院長は、妻に「窒息させろ!」との言葉を投げかけたが、その是非は? さらに、院長は看護師のイーヤに対して、「ステパンには助けがいる」と言いながら、“あるもの”を手渡したが、それは一体ナニ? イーヤははじめ拒んだものの、「これが最後だ」という院長の頼みを受け入れると、病室にいるステパンの首筋に慣れた手つきで注射を……。

私はこのこと (安楽死) の非人道性を批判するつもりはないが、その一部始終を見ていたマーシャは、それをネタに「イーヤとの子供を産むように」と院長を脅かし、ある策略を! それは、何とイーヤを妊娠させるための相手を院長にすることだ。『アトランティス』では、あっと驚く、サーモグラフィを使ったベッドシーンがあり、『スターリンググラード』(01年) (『シネマ1』8頁) では、兵士たちが雑魚寝し、見張りが立っている状況下で

の不自由極まりないベッドシーンがあったが、本作では、院長の部屋でマーシャに促されて服を脱ぐイーヤから「そばにいて」と言われたため一緒にベッドに入るマーシャを含めて“3人のベッドシーン”が登場するので、それに注目！

その後、イーヤの生理が遅れ、妊娠の兆候が現れはじめたが、さて・・・？

■□■3人の同居生活は？イーヤの選択は？■□■

イーヤとマーシャは、女性ながら対独戦を共に戦った戦友だから絆が強いのは当然。したがって、その2人のベッド中に、ニコライ院長が入り込むと奇妙な風景になるのは当然だ。他方、2人が一緒に街に出た時に偶然知り合ったウブな男サーシャが、あの時マーシャといい関係になったことを理由に、2人の部屋に入りびたり、同居生活が始まると・・・？

病院に政府関係者の女性リュボーフィ（クセニア・クテボワ）が慰問で訪れ、紋切り型の挨拶をするシークエンスを見ていると、これぞ“社会主義国、ソ連”という感が強いが、そこで一人一人にプレゼントを配っていたのがサーシャ。何と、彼はリュボーフィの息子だったから、その後は好きになったマーシャに対して何かと物品の便宜を図っていたらしい。マーシャは密かにそんなサーシャを利用し、3人の同居生活を楽しんでいたわけだ。しかし、サーシャが同じ部屋の中にいることに敵対心をむき出しにするイーヤは、「来るのはやめて」「食べ物も欲しくない」と彼の存在を拒否し、ある日一人で出ていくことに。その後、院長のもとを訪れたイーヤが、「空っぽなんです」と泣きじゃくると、院長は「明日、ここを出る。一緒に来るか？」と提案したが、さて、イーヤの選択は？

■□■プロポーズは？母親の対応は？マーシャの選択は？■□■

成人した男女の結婚には、本来両親の同意は不要。しかし、人間社会ではなかなかそうはいかず、家柄や釣り合い等の問題（障害）が2人の仲を引き裂くことも多い。NHKで現在放映中の朝ドラ『ちむどんどん』では、目下、女性料理人の比嘉暢子と青柳和彦との結婚話が暗礁に乗り上げているが、その原因は和彦の母親が、「良家の息子・和彦と暢子との結婚は両家の釣り合いが取れない」と主張しているためだ。

しかして、本作ではマーシャとの結婚を決心したサーシャが、大きなお屋敷にマーシャを連れて行き、両親に紹介するシークエンスで、『ちむどんどん』と全く同じ風景が登場するので、それに注目！『ちむどんどん』では、暢子は以降、毎日得意な料理を届けることによって和彦の母親を“籠絡”する作戦に出ているが、本作では、「花嫁を送り返しなさい」と、サーシャに宣言（命令）する母親リュボーフィに対して、マーシャは“現地妻”だったことを含めて、壮絶な戦争体験の告白を！そんなマーシャの選択は一体ナゼ？

■□■このラストをどう理解？■□■

本作のパンフレットには、①秦早穂子氏（映画評論家）の「戦争の後にくるもの」、②沼野恭子氏（東京外国語大学教授）の「トラウマを抱えた女たち」という2本の Review があり、いずれも読み応え十分だ。『アトランティス』では、ロシアとの戦争によって戦争終結後もトラウマを抱え PTSD の症状に苦しむ元ウクライナ兵士の主人公の姿が描かれたが、

本作ではまさに上記2つの **Review** のタイトルどおり、“トラウマを抱えた女たち”の“戦争の後にくるもの”が描かれる。

看護師として働くイーヤがなぜパーシュカという男の子を育てていたのかは、2人の女性を主人公にしたことによって生まれたストーリー。しかし、イーヤが誤ってパーシュカを死なせてしまったことを、帰還したマーシャが知ったところから生まれる本作のストーリーは、何とも意表を突くものだ。これぞまさに、本作の原案とされたスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの小説『戦争は女の顔をしていない』の象徴的な現れだろう。

アメリカで一貫してトップ1を誇っている映画が、マーガレット・ミッチェルの小説を映画化した『風と共に去りぬ』（39年）だが、そこでは南部の土地タラに生きる女主人公スカーレットの強さが光輝いていた。それに対して、本作の主人公になる元女兵士のイーヤとマーシャ2人は“生きる道”が難しい。あの日、サーシャのもとへ行こうとしながらも、「止めるなら、行かない」と言うマーシャに対して、イーヤは「行って」「心配ない。子供はあげる」と、何かを吹切れたように言っていたが、それは一体なぜ？

本作ラストには、サーシャのお屋敷での母親との“対決”を終えたマーシャが、帰り道に乗っていた路面電車が急停車するシークエンスが登場する。その原因は長身の女性が下敷きになったためだが、長身の女性＝のっぽ＝イーヤ??? いやいや、そんなバカな! ? 本作のそんなラストをあなたは どう理解？

2022（令和4）年7月27日記